

第 1 回世田谷区総合教育会議

日：令和 6 年 7 月 13 日（土）

場所：世田谷区立教育総合センター

午後1時30分開会

○司会 定刻になりましたので、令和6年度第1回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会進行させていただきます政策経営部長の有馬と申します。どうぞよろしく願いいたします。

開催に当たり、本日の会議の流れについて御説明させていただきます。本日は2部構成で行います。

第1部は、基調講演と教育総合センターを拠点とした地域との連携・協働による教育事例の紹介となります。基調講演では、国士舘大学の村上先生に「大学の地域連携と新しいコミュニティのあり方」について御講演いただき、その後、教育総合センターを拠点とした地域との連携・協働による教育事例の紹介として、「魅力ある学校づくり研究校での事例」と「日本語を母語としない児童生徒の支援事例」を報告いただきます。今日は、それぞれ関わった生徒、学生の皆さんの声をお聞きいただく予定でございます。その後、休憩を挟みまして、区長と教育委員会による意見交換を行います。第2部は、意見交換です。第1部での基調講演、取組事例の発表を踏まえまして、区長、教育委員会で議論を行います。

皆様には、第1部の終了後の休憩の際に御質問をお寄せいただきたいと思います。会場にお越しの方は入り口でお渡ししました質問票に、オンラインでの御参加の方はZoomのQ&A機能にて御質問及び御意見をいただければと思います。なお、御質問につきましては、誰に対しての御質問かを明記していただけると助かります。お寄せいただきました御意見、御質問等につきましては、一部となりますが御紹介させていただきながら議論をさせていただければと思っております。

それでは、開催に先立ちまして、保坂区長より御挨拶申し上げます。よろしく願いいたします。

○保坂区長 皆さん、こんにちは。会場の皆さん、オンラインの皆さん、また、村上先生、今日はよろしく願いいたします。

今日のテーマは、これからの学びについてというテーマなのですが、ちょうど11年ほど前に、隣にいらっしゃる中村教育委員がまだ現場の校長先生だった当時、当時の堀教育長と学校長4名の方々、教育委員会事務局、私も含めて、オランダの教育を見にいったという視察を行いました。この中で、1つは、イエナプラン教育とあって、異年齢の子どもた

ちがサークルをつくって、例えば日本で言えば、4年生、5年生、6年生の異学年の子たちが混じり合ってグループをつくって、そして、その一人一人の子どもたちが自分の時間割をつくって、つまり一斉授業ではないそういう学び方をして、最後はプレゼンテーションという時間で地域の人たちに学習成果を披瀝するといったイェナプラン教育という在り方に対して大変新鮮に受け止め、また、オランダの公立学校、そして様々な教育機関を支えているオランダの教育センターにも行ってまいりまして、今振り返ると、ここ世田谷の教育センターができて2年と少したちますけれども、ようやく教育の質を変えていく、よりよくしていくというところに踏み込んできたなという感慨を深くしております。

昨年の今頃ですと、世田谷区教育大綱、これを行政特有のあまり個性がない文章で羅列するのではなくて、新しい教育のマニフェスト、宣言といった形で書きまして、これを小学生と中学生に読んでいただいて、子どもたちに発表していただきながら、教育委員や私も、その子どもたちとやり取りをするというのをちょうど去年の今頃やりました。

この総合教育会議は2015年から続けてまいりまして、来年で10年という期間がたちますけれども、最初の時期、先ほどオランダの話をしましたけれども、どのような学びの質の転換が必要なのか、障害のあるお子さんを支える特別支援教育、インクルーシブ教育はどうあるべきなのか、不登校をどう受け止めるべきなのか、あるいはICT教育をどうするべきなのかというような、これから何をしていくかという課題の整理が多かったんですが、後半になってきて、さあ、実際のプラン、運営に転嫁しのせていこうという具体論に入ってきているのが現在だと思います。

今日もそういった発表が、地域と大学の連携をはじめ行われると思いますので、どうか最後まで、ちょっと長丁場になりますが、総合教育会議を有意義なものにしていけたらと思います。どうか皆様よろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

続きまして、本年5月18日に教育長に就任いたしました知久教育長より、就任に当たっての御挨拶を申し上げます。

○知久教育長 皆さん、こんにちは。教育長の知久孝之と申します。改めまして、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、教育長就任間もないこともございますので、お時間をいただき、自己紹介も交えまして、教育行政を進めるに当たっての基本的な考え方ですとか、大事にしたいことなどを述べさせていただければと思います。着座して御説明をさせていただきます。

では、まず自己紹介からさせていただきます。前任の渡部前教育長は、御案内のとおり教員の御出身でしたが、私は世田谷区の行政職の出身です。平成元年、世田谷区入職以降の職歴をここに挙げさせていただきます。区では、商店街振興や防災まちづくり、障害者支援などのソフト業務から、道路整備などのハード業務まで幅広く、出先や現場で区民の皆さんと向き合う業務に長く従事をしてまいりました。60歳の役職定年前の6年間ですが、保育部、また教育委員会の事務局で世田谷の子どもたちの保育や学びに関連する政策を担当する部長職として従事をしてまいりました。

昨年度、教育委員会事務局の担当部長として策定を指揮しました世田谷区教育振興基本計画、こちらに載せてございますが、この4月からスタートしました。教育長として、本計画を着実に実行していくことが私の責務となります。計画を進めるに当たって、私が考える大事にしていきたいことを、これまでの行政での経験も踏まえ、3つにまとめましたのでお伝えしたいと思います。

まず、「現場を大事にする」です。昨年度、区立小中学校の教員の方々にアンケートを実施したところ、6割以上の教員が、教育委員会は学校現場の状況を把握できていないとの否定的な回答がございました。学校現場との信頼関係を高められるよう、学校現場に足を運び、教員の声に耳を傾け、教育委員会と学校が一体となって課題解決に取り組める体制づくりを進めてまいりたいと思います。

2つ目が、「子どもの最善の利益を考える」です。子どもに限らず、障害者、高齢者など配慮の必要な方々への支援は、当事者の声を聞く、思いを反映させることが定着してまいりました。一方で、その当事者の最善の利益が、支援者側の考えるところの最善の対応策に置き換えられて使われるケースも少なくないのではと考えています。教育委員会として施策を進める際には、バイアスのかからない思いのもとで子どもの声を聞き、判断することを基本に、子どもの意見が反映される子ども主体の教育を推進してまいります。

最後に、「深刻化する人材・人手不足に備える」です。教員の欠員、休職などにより、副校長などの管理職が授業を受け持つといったことが各学校で生じています。また、学校運営は、ALTや給食調理など様々な業務で民間事業者を支えられておりますが、先だっては旅行代理店が修学旅行中のバスを手配できないといったニュースも流れているなど、民間事業者も人手不足が深刻化している状況がございます。こうした状況下、教育委員会としても、これまでの対策を大胆にパラダイムシフトする教員の働き方改革やDXの推進など、速やかに結果を出せるよう取り組む必要がございます。あわせて、こうした緊急

事態に備え、危機管理対応力の強化に努めてまいりたいと思います。

最後になりますが、今後、教育長としての重責を担っていくわけですが、世田谷の子どもたちのため、なすべき仕事をしっかりと果たしてまいりたいと考えております。

教育振興基本計画で新たに定めた教育目標「幸せな未来をデザインし、創造するせたがやの教育」の推進に向け、本日御参会の皆様方の御支援をお願いしまして結びとさせていただきます。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。

それでは、総合教育会議について御説明します。総合教育会議につきましては、法律により地方公共団体の長及び教育委員会で構成されております。ここで本日の会議に参加されております世田谷区教育委員会の委員の皆様を御紹介させていただきます。

知久教育長です。

澁澤委員です。今回はオンラインで御参加いただいております。澁澤委員は、現在、NPO法人理事長を務められており、各地で講演など行われております。また、次世代を担う青少年の育成や環境啓発活動に携わるなど様々な分野で御活躍されております。澁澤委員、よろしく申し上げます。

○澁澤委員 Zoomでの参加ですが、同じ気持ちで参加したいと思います。よろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

では、続きまして、中村委員です。中村委員は、中学校の教諭、副校長、世田谷区立中学校長を歴任し、校長会会長を務められ、東京都の教育の現場の第一線で活躍されてきました。

続きまして、鈴木委員でございます。鈴木委員は、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長や東京都小学校PTA連合協議会副会長、区立小学校の学校支援コーディネーターも務めてこられました。

続きまして、坂倉委員でございます。坂倉委員は、これまで慶應義塾大学のグローバルセキュリティ研究所特任講師や、世田谷区社会教育委員などを歴任され、現在は東京都市大学都市生活学部教授を務めるなど、教育行政の発展向上に貢献いただいております。なお、坂倉委員には、第2部で御自身の取組事例について紹介していただく予定となっております。

委員の皆様、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、第1部の基調講演に移ります。今回は、国土舘大学文学部教授で、地域連携・社会貢献推進センター長の村上純一先生に、「大学の地域連携と新しいコミュニティのあり方」について御講演いただきます。村上先生には、令和4年度より地域連携・社会貢献推進センター長として、区との連携取組において様々お力添えをいただいております。

それでは、村上先生、どうぞよろしくお願ひします。

○村上氏 皆さん、こんにちは。御紹介いただきましたように国土舘大学地域連携・社会貢献推進センター長をしています。世田谷区との連携に携わって3年目になります。今日は、この会議のテーマである「これからの世田谷の学びについて～子どもたちの多様性や個性を伸ばす学びの場づくり」に関して、地域と大学の連携を切り口に話題提供したいと思ひます。

これからお話しさせていただく内容は、まず、この仕事に携わって私が考えるようになった素朴な疑問、2つから始めます。1つは、大学関係者の地域連携に対する奇妙な反応です。もう一つは、世田谷区が、大学との連携で、ギブ・アンド・テークではなく、ウィン・ウィンを目指すとおっしゃっていることの意味についてです。私は、これを面白いと思ひましたが、どういう意味で理解したらいいのか考えてきました。そして、ギブ・アンド・テークに対するウィン・ウィンには新しいコミュニティ感覚があるのではないかと思ひようになりました。そこで、次に、既存のコミュニティと新しいコミュニティの違いについて触れます。最後に、新しいコミュニティ感覚と学びの関係について思っているところをお話しします。

まず、地域連携に対する大学関係者の反応です。私が最初に少し驚いたのは、地域連携に対して無償奉仕のようなイメージがあつて、警戒心があるということです。私は、大学が地域と連携できれば、学生の教育機会が広がると考えています。しかし、それはナイーブ過ぎるという意見を複数の大学教員から聞きました。地域と大学の連携はなぜ進められるべきなのでしょう。まず、私たちを取り巻く環境として、少子高齢化社会があります。人手不足と財源不足の中で大学を含む社会的諸資源の有効活用が求められています。これは連携の外的要因、あるいは環境要因として実際に存在します。一方で、地域と大学の連携の内的要因、つまり双方にとってどういう意味があるのかという問題は、まだ深められる余地がありそうです。この点について少し考えてみたいと思ひます。

地域と大学の連携事業の中で、学生を派遣するということがあります。それには3つの方式があります。1つは、アルバイトとして派遣するというやり方です。学生派遣という

と、アルバイト料はどうなっているのかという質問が教員サイドからほぼ必ず出ます。こうした人たちは、学生が地域の活動に協力することを、労働力と時間の提供だと考えていると思います。その対価としてのアルバイト料ということです。2つ目は、ボランティアや奉仕活動は、むしろ対価なしでやるべきだという考え方があります。国士舘大学の場合、建学の精神で、世のため人のために尽くす人材養成ということをやっていますので、安易に労働力提供と捉えるべきではないという考え方もあります。3つ目の方式は、学びの一環として、可能であれば、学びの成果を適切な形で単位認定していくという道です。

1つ目は、学生をサービスの提供者とみています。私は、3の学びの一環として派遣をもっと進められたらと思っていますが、そのためにはサービスの提供者と見る見方の限界性を明らかにする必要があると思うようになりました。このサービスの提供者という見方の問題点については、後でコミュニティーの話をする際に触れます。

私の素朴な問いの2番目です。世田谷区が、大学との連携で、ギブ・アンド・テークではなくウィン・ウィンを目指すとおっしゃっていることは、どういう意味なのか。恐らくギブ・アンド・テークというのは、お互いのメリットになることを別々に行うことを指していると思います。それに対して、ウィン・ウィンというのは、例えば教育に関して言えば、世田谷区と大学との間で、児童生徒と大学生が共に成長できる企画やプログラムを一緒になってプロデュースすることだと思います。そのためには、世田谷区と大学が価値や目的の共有を目指すということが不可欠だと思います。価値や目的の共有については、この会議のテーマに含まれる多様性と個性との関係について触れる必要があると思います。それは多様性と個性の時代に価値や目的の共有を目指すことができるのか、また目指すべきなのかという問題です。

価値や目的の共有を目指すのは、もちろん多様性と個性を否定することではありません。価値や目的の共有を目指すことは、同化政策やコンフォーミズムと呼ばれる強い者が弱い者に対して価値や目的の需要を要求することと同じではありません。同化政策やコンフォーミズムというのは、多数派のコミュニティーの中に少数派を入れてあげるという発想です。

それに対して、多様性と個性の時代の価値や目的の共有は、多様性と個性を前提として、その中から共有する価値や目的をつくり出すことを指すと思います。ウィン・ウィンが、地域と大学が価値や目的の共有を目指すとするなら、それは次に述べるような新しいコミュニティーの創造と関わってくると思います。

新しいコミュニティーと言いましたが、では、既存のコミュニティーと新しいコミュニティーの違いはどこにあるのでしょうか。これはいろいろと論じられている問題ですが、次のように簡単にまとめてみます。

既存のコミュニティーは地縁、つまり住む土地による縁故関係です。新しいコミュニティーと比べると近接性が高いです。また、メンバーの境界線が比較的明確で、メンバーの立ち位置もある程度決まっています。その関係性においては、情けとメンツが重視されます。言い換えると、お互いの立場の違いを踏まえて、相手を尊重する関係性だとも言えます。その意味で、それ自体は決して悪いものではなかったと思います。しかし、コミュニティーは既に存在するもので、そのコミュニティーの仲間に入れる、入れてもらうという郷に入っては郷に従えの考え方を含んでいます。この地縁型コミュニティーはまだ残っていますが、縮小しつつあると思います。

新しいコミュニティーは情報化社会の中で発展したもので、自発性と多様性がベースです。メンバーの立ち位置や役割が不明瞭で、所属感も強くない代わりに、自由で平等な関係があります。地域の課題解決のために、情けとメンツで重い腰を上げるというより、楽しみを求めて集まるイメージです。そして、コミュニティーは「ある」よりも「創る」というイメージです。

私たちは、今述べた既存のコミュニティーと新しいコミュニティーの両方に住んでいると考えられます。既存のコミュニティーに慣れている面と、新しいコミュニティーに慣れつつある面の両方あると思います。私は、既存のコミュニティーを支えてきた方々に対して敬意を表しますが、同時に、そうした方々が、もしかしたら自分も新しいコミュニティーをつくる側にいるのかもしれないと気づいていただければと思っています。ところで、私たちは新しいコミュニティーの自由で平等である反面、自発性と多様性を尊重する面に居心地のよさと不安定感の両方を感じているのではないのでしょうか。既存のコミュニティーが持っていた立ち位置の安定感に欠ける部分が、新しいコミュニティーにはあるようです。

この立ち位置の不安定感の問題を少し掘り下げてみたいと思います。今、私たちは社会生活を送る上で非常に多様で複雑な選択肢と可能性を持っています。以前の社会にはなかったものです。社会生活が年齢や性別などの属性によって、ある程度型にはめられていた時代はそれほど昔ではありません。高度成長の時代ですら、サラリーマン、核家族や主婦といった型の中で生活していました。そのような立ち位置が人々に与えられていました。

今の社会は個人が取り得る選択肢と可能性が多過ぎて、自分の立ち位置を無意識に求めてしまう傾向があると感じています。では、現代を生きる私たちはどのような立ち位置を採用しがちなのでしょうか。

それは、サービスの提供者とサービスの受け手という対概念ではないかと私は考えます。これは私たちが消費社会、サービス社会を生きていることと関係があります。私たちの仕事の多くが、よりよいサービスをできるだけ安いコストで提供するという産業風土の中にありますし、また、消費者としてはコストパフォーマンス追求で、できるだけ安いコストで、よりよいサービスを受けたいという生活感覚の中にいます。こうしたことから、社会生活を送る上で、私たちは自分がサービスの提供者の側にいるのか、サービスの受け手の側にいるのかという立ち位置の問題に無意識的に敏感になっているのではないのでしょうか。サービスの受け手という意識が行き過ぎて、クレーマー、カスタマーハラスメントやモンスターペアレントといった現象を生み出しています。

大学で働いている私は、まだモンスターペアレントに出会ったことがありません。国立館大学にも教育懇談会という保護者との懇談会がありますが、大体は和やかな雰囲気だと聞いています。ただ、以前こんなことがありました。分科会に出席していたある父親がマイクを持って、息子の所属するコースの教員採用試験対策が物足りないということを述べ、もっとやってほしいと発言しました。対応した教員は、大学組織の中で、教職支援室がそれを行っているのでそちらに積極的に参加してくださいと回答しました。それに対してこの父親は、別の国立大学では教員がもっと積極的に行っていると述べ、不満そうな様子でした。ちなみに、この父親の職業は公立中学校の教師でした。

このとき私は、ふだんはサービスの提供者として保護者からの要請にいろいろと応じている先生が、今日はサービスの受け手である父親として振舞っていらっしゃるのだなと感じました。恐らくいろいろな御苦勞があって、その立ち位置がサービスの提供者からサービスの受け手に、切り替わるスイッチが入ってしまったのだらうと思います。一人の人間が、そのどちらかに属するというのではなく、時と場合によって、どちらかに入れ替わるということです。

最初にお話しした地域に学生をアルバイトとして派遣するという大学教員の感覚にも、これに共通するものがあるのではないかと感じます。こうした教員にとっては、サービスの受け手としての学生は、恐らく講義を受ける学生です。学生は授業料を払って講義というサービスを受ける人となっています。一方、地域の活動に参加する学生は、サービスの

提供者となります。少なくない大学教員が無意識的にこの枠組みを採用しているように見えます。私は、学生をサービスの受け手やサービスの提供者の立ち位置に置くことは、彼らの学びを豊かに保障するのかどうか、気をつけたほうが良いと思っています。

さて、世田谷区がギブ・アンド・テークとウィン・ウィンを区別しているのは、この立ち位置の問題と関係しているのではないかと考えられます。例えば地域と大学の連携をギブ・アンド・テークで行っていくというのは、自治体の側の住民サービス上のメリット、大学の側の教育と研究上のメリット、それぞれをお互いに認識し合って、サービスの提供主体になったり、サービスの受け手になったりしながら、連携を進めるというイメージです。意地の悪い言い方をすると、利用したり利用されたりという関係です。これは全否定できないスタイルだと思いますが、一方で、このやり方だと、両者はどこまでいっても、新しいコミュニティーをつくることはできないと感じます。サービスの提供者とサービスの受け手の関係は、何となく取引を連想させる関係で、歩み寄りの関係ではないからです。先ほども述べましたように、世田谷区と大学が新しいコミュニティーを形成するためには、価値や目的の共有を目指すことが必要です。そしてウィン・ウィンはそれを表していると思います。

最後に、新しいコミュニティー感覚が楽しくやる、価値や目的の共有を目指す、人格で関わるの3点を含んでいることを述べて、それ自体が学びであることを述べます。楽しくやると、価値や目的の共有を目指すについては既に述べましたので、人格で関わるについて簡潔に触れます。

新しいコミュニティーは、義務や役目、立場や役割で関わるものよりも価値や目的の共有を目指してつくるものだと考えられます。したがって、新しいコミュニティーは、みんなで考えたり、意見を言い合ったり決めたり、自分を表現したりという面が大きくなります。自分を表現するという点では、若林小学校の児童が国士舘大学の楓門祭に参加してライオンキングを上演してくれました。それを見た佐藤圭一学長が、心からの感謝の言葉を述べたのは、役目よりも人格を表していたと思います。それは、若林小学校の児童たちが、人格で劇を披露してくれたことに触発されたのかもしれませんが。このように、新しいコミュニティーでは既存のコミュニティーよりもメンバーの人格が現れやすいし、また、メンバーには人格で関わるのが求められると思います。

学びに話を戻すと、このことは学校教育の言葉で言うと、とりわけ思考力、判断力、表現力が活性化するということです。この思考力、判断力、表現力は、御存じのように、学

力の3要素であり、カテゴリーとして分けると、①知識技能、②思考力・判断力・表現力、③学びに向かう力・人間性です。新しいコミュニティをつくるために、これらの学力要素は不可欠です。ということは、新しいコミュニティをつくったり、発展させたりするとき、それに関わる人は常に学んでいるということになります。子どもであっても、大人であっても、みんな学びを実践しているということになります。

この学びは勉強とは性質が異なります。一般に勉強として捉えられている活動は、問題集をしたり、参考書を読んだりするというものです。勉強は、そのもともとの中国語は、嫌なことを我慢してやるという意味であるように、無理をしてやるものです。この勉強のイメージが強過ぎると、学んでいる人はその学びを実感しないということが起こってしまいます。新しいコミュニティの学びは、勉強とは異なり、楽しく、共に、人格でやるものだと考えられます。この学びは実践されているのに、まだ十分に人々に認知されていないという面があります。

子どもたちや学生たちは、楽しく、共に、人格で関わる活動をいろいろなところで行うことができます。これをしっかり学びとして認識していくことも大事だと思います。新しいコミュニティへの参加は、学びの古いイメージからの脱却の可能性も持っています。世田谷区と大学の連携事業について言えば、それに関わる大人たち、子どもたちや学生たちが共に楽しくやる、価値や目的の共有を目指す、人格で関わる活動を行うことによって、新しい学びのイメージが獲得されるのではないかと考えています。その意味で、新しいコミュニティをつくっていくことと、学びはイコールと言ってよいと思います。

お話しさせていただいた内容をまとめます。世田谷区内には、国士舘大学を含め、数多くの組織や団体が存在しています。それぞれが異なった価値や目的を持って活動しています。つまり多様性と個性がそこにはあります。そうした組織や団体と世田谷区の連携の在り方も多様だと思います。今日、考えてみたいと思ったのは、これらの組織や団体の多様性や個性を、子どもたちの多様性や個性を生かす学びの場づくりへと結びつける視点です。私たちが大事にしていきたいと考えるのは、世田谷区と大学がそれぞれの個性を生かしながら新しいコミュニティを創造していくという方向性です。

世田谷区おっしゃるウィン・ウィンという言葉は、私はこのように理解しました。世田谷区と大学がいろいろな企画やプログラムを実施できるようになって、児童生徒、そして学生の学びと成長を支えられるようになるために、今述べたような方向性が大事だと思います。それを実現するのは簡単ではないですが、それは、子どもたちや若者たちだけでな

く、私たち大人にとっても学びや楽しみになることは間違いないと思います。

以上で話題提供とさせていただきます。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 村上先生、ありがとうございました。講演の中にありましたウィン・ウインの意味について、世田谷区と大学、小中学校と児童生徒、また大学生、さらには地域の方々、皆さんがウィン・ウインになることが必要であると、改めて考えさせていただきました。ありがとうございました。

続きまして、「教育総合センターを拠点とした地域との連携・協働による教育事例」についての御紹介に移りたいと思います。

1つ目は、魅力ある学校づくり研究校での事例です。若林小学校を拠点として、地域や大学が共に子どもたちの学びについて考え、取り組んだ事例について御報告いただきます。

それでは、皆様、よろしくお願ひいたします。

○伊勢 ただいま御紹介いただきました世田谷区立若林小学校主幹教諭の伊勢祐美子と申します。本日は貴重な発表の機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

今日ここに来ているメンバーの紹介をさせていただきたいと思います。自己紹介で。

○タノウエ 世田谷中学校所属のタノウエユイです。よろしくお願ひします。

○ケタ 学芸大学世田谷中学校のケタリュウノスケです。よろしくお願ひします。

○樋口 本日は保護者の代表兼若林中央商店会事業部の立場で参加させていただきます樋口と申します。よろしくお願ひします。

○伊勢 さて、昨年度、本校は教育委員会の先進教育研究の指定を受けまして、子どもたちが生き生きと輝く魅力ある学校づくりについて研究実践を行ってまいりましたので、本日は実践報告をさせていただきたいと思います。

本校では、魅力ある学校に欠かせないものとして、豊かな学びの場の創造を第一に考えました。また、豊かな学びの場をつくっていくためには、学校のみ力だけではなく、学校外の教育資源を積極的に学校教育に取り入れたり、専門性を有する方々と一緒に授業をつくったりすることで新たな学びの場を創造できると考えました。

魅力ある学校づくりに向けては、豊かな学びの場を創造すること、そして、個別最適な学びや協働的な学びを一層推進し、子ども自身が学ぶ楽しさや有用さを実感できるということ、子どもが生き生きと輝く魅力ある学校につなげていくことができるのではないかと考えました。

そこでまず、豊かな学びを創造するために「若林サミット」と題しまして、外部の教育

力に当たる地域の方々や学校関係者の方々、国士舘大学の皆様など様々な立場の方々と豊かで多様な学びについて意見交換をする機会を得ました。

こちらは、この若林サミットで話題に上がった内容を、実際に授業として実践したものです。

ほかにも、スライドにあるように、1年生から6年生まで全学年で外部の教育力を生かした授業を実践しました。本日はこの中で、昨年度6年生が取り組んだ「若林の未来～そして、その先へ」の取組について詳しく説明させていただきたいと思います。

若林サミットで、地域の方や大学関係者の方々に紹介した6年生の取組を紹介します。まず、特別活動で学級活動、学級会で自分たちのクラスがさらに仲よくなるためにお祭りの計画を立てようという議題で子どもたち自身が話し合いを行いました。話し合っただけで決まったことを基にして、お祭り集会を学年クラスで行いました。学級の仲も深める、楽しい会になりました。お祭り集会が終了し、片づけを始めた休み時間に、本校の1年生の何人かが教室に遊びに来てお祭りに飛び入り参加することになりました。全てはこの学級活動からスタートしたように思います。

その後、若林サミットがありまして、お祭り集会の様子を紹介したところ、国士舘大学の関係者の方から、国士舘大学の楓門祭に出ませんかという話題が出ました。そのときは、大学祭に出られるのかなとちょっとぼんやりした気持ちでその話を聞いていたのを記憶しています。

若林サミットの後、今度は子どもたちと地域、保護者、行政の関係者が一堂に会して話し合いの場を持ちました。

子どもたちのグループに大体お一人の関係者が入って、地域の方とか保護者の方とかに入っていて、若林の魅力や若林の課題について話し合いました。若林のまちの未来がよりよくなるために今の自分たちに何ができるのかということを考え、話し合いました。地域の皆さんとの話し合いの中で、若林の魅力を理解し、今後さらに魅力あるまちづくりを行うために、自分たちに何ができるのかということを考えるすばらしい機会になりました。

若林サミット、地域の方々との意見交流を経て、自分たちが得意とする、子どもたち自身が得意とすると鼓笛隊の演奏、お祭りの出店、学芸会で上演したミュージカル「ライオンキング」などを国士舘の楓門祭で発表することができました。2日間で4回「ライオンキング」を上演することができました。

このときに、実際にミュージカルでも、今御覧いただいている写真でも真ん中で歌って

踊っているのがケタ君なので、ちょっとそのときの様子、感想をケタ君に話していただきたいと思います。

○ケタ そうですね。結構、国士舘大学の方に人が入ってくれて、小さい子から御高齢の方まで見に来てくれて、地域のつながりというのであったり、地域に支えられているんだなということも、すごい強く実感したというか、そういう「ライオンキング」になりました。

○伊勢 学長先生からすごい熱いメッセージをもらったと思うんですけども、そのことを覚えていますか。そのときどう思いましたか。

○ケタ 本当に、そういう国士舘大学の学長さんに意見をもらったり、感想をいただくというのはすごい貴重な機会ですし、そういうのもらってすごうれしかったなという気持ちは覚えています。

○伊勢 私たちにとっても、教員側にとってもすごく感動する場面でした。そういう国士舘大学楓門祭の取組が終わりまして、今度は3学期、小学校でいうと3学期なんですけれども、若林の課題である若林を代表する名物がないという子どもたちから出た課題解決に取り組むために、再び地域、保護者、行政、そして国士舘大学の今度は学生さんにたくさんお越しいただきまして意見交換を行いました。話合いを経て、子どもたちは自分たちで若林の名物を作ろうというプロジェクトを立ち上げることができました。

プロジェクトチームごとに、地域の商店街の方々や学生、行政の方々からたくさんのアドバイスをいただきまして、どうしたら若林の名物を開発し、商品化することができるのかという考えを深めることができました。商品を形にするまでには、綿密な計画と熱意が大事だというようなアドバイスもたくさんの方からいただきましたし、商品を買ってもらうには様々な工夫が必要だということも、子どもたちは実感することができたように思います。

この場にお越しいただきました保護者であり、商店街の関係者である樋口さん、そのときの様子、感想を伺えればと思います。

○樋口 この若林土産だったり、名物を作りたいというお話をいただいたときに、ちょうど商店街のほうでも、やっぱりコロナが落ち着いてきたというところもあって、ちょっとここでブーストをかけて、一気にみんなで元気をつけていきたい、地域を盛り上げていきたいというところでちょうどこのお話をいただいて、まさに先ほどお話にもあったように、ウィン・ウィンな感じで何か盛り上げていけたらなと思い、お話をいただいて、子どもた

ちからたくさん、例えばこけしを作りたいとか、まんじゅうを作りたいとか、いろいろな意見をいただきまして、できる限り全て実現したいなと思って、その後、先生を踏まえ、子どもたちと一緒に相談をしながら、これを実現に向けていこうとそのときには思いました。

○伊勢 続けてケタさん、10個ぐらいプロジェクトチームが立ち上がりましたがけれども、全部できるとそのとき思いましたか、どう思っていましたか。

○ケタ たくさんプロジェクトチームに分かれて名物を作ろうという話になって、実現できそうなものあれば、結構難しそうだなと思ったりするのもありましたし、10個ぐらいの中から二、三個、名物として選ばれるのかなぐらいの感じでいたんで、やっぱりお店で、名物に10個も選ばれたというか、そのプロジェクトチームごとに出した意見が全部名物になったというのは、何かすごい驚いたという感じでしたね。

○伊勢 ありがとうございます。私も本当に全部まさか実現するとは思わなかったんですけども、たくさんの方の支えとの協力があって全て商品化することができました。

実際にどのように商品化していったのかということ、ちょっと画面を御覧いただければと思うんですが、まず、キーホルダーを作ろうということで、若林小学校のイメージキャラクターである「わかばちゃん」と、おなじみの世田谷線の車両を基にして、商店街の皆様協力いただきながら商品化にこぎ着けました。このプロジェクトチームに入っていたのがタノウエさんなので、タノウエさんから、ちょっとどういう過程でこういうデザインになったのかななどを紹介してもらおうとありがたいです。

○タノウエ 初めは、お客さんに商品を手にとってもらうということで、若林をイメージとしてデザインを描いていったんですけども、自分たちで作るとということで、地域の方とか、学生さんのアイデアもいただいて、若林小学校のキャラクターを取り入れて、それをミックスして、班のみんな協力してデザインを完成させていって、最終的に、「わかばちゃん」と、若林、世田谷線をコラボさせたキーホルダーにしました。

○伊勢 何回ぐらい描き直したりしましたか。覚えてますか。

○タノウエ 最初に描いてからアドバイスをもらって、七、八回ぐらいは、大分描き直して、いい作品になるように頑張りました。

○伊勢 樋口さんからもたくさんアドバイスをいただいたんですけども、そのときのこととも紹介していただけますか。

○樋口 商店街のほうの意見もいろいろと子どもたちのほうには説明させていただいて、

例えば世田谷線だったり、キャラクターというものはどうしても著作権だったり肖像権とかいろいろあるので、そういうところも踏まえた上で、オリジナルになるような感じで、自分のアイデアをあくまでもゼロにしないで、自分のアイデアがありつつ、エッセンスを入れた感じのデザインで商品をたくさん作っていこうという形で、このほかにもありましたお守りだったり、こけしだったり、クッキーだったり、そういうところを子どもたちと話し合いをしながら、いかに自分らしさがあって、若林らしさ、若林小学校らしさを見せられる、そういう作品を作れるか、時間をかけてみんなでやっていって、実際このキーホルダーも、世田谷線、そして「わかばちゃん」、シンボルとなるものを2つ合体させて、キーホルダーの裏側には若林小学校の校舎をイメージしたデザインを入れたり、とてもすばらしい作品ができたんじゃないかなとそのとき思いましたし、今でもこのキーホルダーは大切に僕もカバンにつけています。

○伊勢 完売したんですけれども、今、再び欲しいという意見があって、今後、もしかしたら再販されるかもしれません。

ほかにもプロジェクトチームがたくさんありましたけれども、例えばこちらのこけしに関しては、やはり若林小学校のイメージキャラクターである「わかばちゃん」を基にして、手に取った人が幸せな気持ちになるデザインというふうに子どもたちがテーマを設定して、群馬県の田村工芸さんの職人さんの協力を得て商品化することができました。

また、シフォンケーキを開発するチームは、カラフルでおいしい、見た目がすごく、見たときにもったいないなと思うような、本当にすてきな色に仕上げたいという子どもたちの希望があって、こういうケーキを開発したいという子どもたちの思いがあって、若林中央商店会のラ・ファミーユの職人さんから数多くのアドバイスを受けて、何度も放課後子どもたちと一緒に出かけ、アドバイスをもらいながら、試食を重ねながら、納得のいくシフォンケーキが完成しました。

最終的に、御覧いただいているような商品を開発、制作することができました。開発した商品を、3月に行われた若6卒業感謝祭で販売し、たくさんの方々の元へ届けることができました。

ケタさんは、絵はがきを3枚作りましたけれども、今ここに写真にも載っていますけれども、そのときのまた様子を紹介してください。

○ケタ 絵はがきを販売するに当たって、3枚セットするというのも手作業で結構頑張ったというのがありますし、頑張った絵はがきというか、ポストカード、自分で写真も撮り

ましたし、ポストカードを買ってもらおうということはすごうれしかったですし、手に取ってもらって見てくれたり、応援したいからといって4セットぐらい買ってくれる方もいたりしたので、それはすごうれしかったです。

○伊勢 子どもたちの振り返りの声をちょっと紹介したいと思います。

開発した若林の名物とミュージカル「ライオンキング」で地域の人たちが笑顔になってくれて本当にうれしかったです。商品を開発して販売することが、こんなに大変なんだということを学びました。この学習の経験を将来やりたい仕事に生かしたいと思います。名物を開発するために、友達と商品化してくださったお店の方と何度も話すうちに楽しくなってきました。完成したときには幸せな気持ちになりました。手に取った人が大切にしてくれるものを友達と考えて作りました。大人の世界の厳しさも少し知ることができました。自分の想像を超えた充実した1年間を過ごしました。こんなことができるなんて信じられなかった。頑張って本当によかった。そのほか、たくさんの振り返りの声がありました。

最後に、この写真は、昨年1年間の取組を象徴する私自身が思うベストショットの1枚です。学芸会の「ライオンキング」、楓門祭でも「ライオンキング」を上演させていただきましたけれども、そのライオンキングの練習しているところの様子なんです。なかなか声の出ない、恥ずかしがってなかなかできなかった子たちを、周囲の子どもたちが応援しながら一緒に歌っている、踊って見守っている様子です。その場にいる全員が自分事として取り組んでいましたし、人との関わりの中で挑戦したり失敗したりしながらそれを繰り返して、大きな達成感を味わうことができたんじゃないかなと思います。

私自身もその場に伴走するような形で立ち会うことができ、何より楽しい1年を過ごすことができましたし、ここで得たつながりというのが今年度の教育活動にも大きく活かされていますし、また、こういう本当に大変なたくさんを可能にできたのは、たくさんの方の保護者、それから地域、行政の皆さんの支えと協力があったからこそこのような活動ができました。これからも今回のいろんな取組を生かして、またいろいろな教育活動に頑張っていきたいなと思っています。

ちなみに、ここで開発した商品は先日の若林の七夕まつりでも中1の子たちと販売させていただきましたし、今後ある盆踊りなんかでも、また紹介をさせていただく予定です。ここで売上げたお金に関しては、若林の緑化に使いたいという子どもたちのアイデアを尊重して、種を買ったりとか、それから木を植えたりするような形で、今度9月にレモンの木を植樹する予定になっていますので、また、その木を使って、レモンが取れば、また

後輩たちがそれで何かを開発していくのではないかというちょっと期待もありますので、またこれからも楽しみに見守っていただければと思っております。

御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。皆様、改めて大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、2つ目は「日本語を母語としない児童生徒の支援事例」でございます。梅丘中学校内に設置されている世田谷区帰国・外国人教育相談室において、子ども、学生双方にとって学びにつながった日本語支援の取組について御報告いただきます。

それでは、皆様、よろしくをお願いいたします。

○坂本 改めまして、世田谷区帰国・外国人教育相談室の坂本でございます。本日はいろいろありがとうございます。

まず、スタートのお話をさせていただきたいと思います。この大学連携の話がございましたのはおとしになります。政策研究・調査課より、帰国・外国人の子どもたちと大学がうまく連携できないだろうかというお話がありました。初めは、どうなるかなというすごく期待と不安と混ざり合ったものでしたけれども、先ほどお話がありました国士館の先生方、その当時、多分10人近く、Zoomも含めて話し合いを続けさせていただきました。ただ単に大学生がボランティアとして子どもたちの言語に寄り添うというだけではなく、大学生にとっても実のあるもの、そして帰国・外国人の子どもたちにとっても実りのあるものにしていきたいという願いを込めて話し合いを続けさせていただきまして、昨年度試行を始めました。それを基にしながら、今年度につながっております。

具体的なお話は、これからプレゼンでお話をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

○宮本 帰国・外国人教育相談室相談員の宮本と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、「日本語を母語としない児童生徒の事例」ということでお話をさせていただきますが、その前に、現在世田谷区に来ています外国人の児童生徒に対して、世田谷区が日本語指導含めて行っている4つの事業についてもお話をさせていただきます。まず、1つ目は、外国人児童生徒の実態についてお話をさせていただきます。次に、帰国・外国人教育相談室としての事業の取組。3番目に、日本語を習得するときどうしても大きな壁になってしまう生活言語と学習言語というものについて。そうした実態を受けながら、4番目の国士館大学との連携事業についてお話をさせていただきます。

まず最初に、外国人児童生徒数の現状です。これは人数ですけれども、全国、東京都、世田谷区と分けまして、これは二、三年のデータでありますので、概数になっておりますけれども、お許しください。全国で今、在留外国人が約341万人、東京都が64万人、世田谷区が2万5000人、その中で小学生、中学生の人数は、全国では4万5000人、東京都が1万5000人、そして、世田谷区は約1000名の外国人の児童生徒が在籍をしております。その中で、公立小中学校、全部で90校ありますけれども、そこに在籍している児童生徒数は約500名になっております。各国につきましては、やはり中国が非常に多く29%、韓国16%、その後、アメリカ、台湾、ベトナムと続いているのが現実です。

こうした人数で、子どもたちが生活していく中で、一つ、文化間移動、要するに来日している多様な子どもたちについてちょっとお話をさせていただきます。特にその子どもたちの困難さ、つらさ、大変さについて具体的にお話をさせていただきたいと思います。

まず最初に、大学生、留学生とは違って、子どもたちの意思では来ていない子どもたちがほとんどです。保護者、親の仕事についてくるという、余儀なく移動されているという実態があります。そして、学校に入り、または生活していく中で、異文化、または言葉の壁に困惑する日々。学校に通ったときにも、今までの学習経験との違い、また、今までの学習の内容との違い、そして、学校そのものの学校文化の違いなどを伴うことはたくさんあります。

もう一つ、違う視点でお話をしたいのは、日本に来日したときの年齢です。言語形成期前期の最後が約10歳と言われております。小学校4年生が1つ大きな区切りと言われておりますが、来日の年齢が、例えば小学校低学年または幼稚園で来日した子どもたちと、中学校になってから来日した子どもでは、第1言語である母語の定着に非常に差があるために、第2言語、日本語に対して取り組む環境に非常に差が出てきます。そうしたところに、1つ大きな言語の壁があると考えています。次に、個人的に環境の変化にすぐに対応できる子ども、また環境の変化にとっても時間がかかる子ども、これによっても、来日した子どもたちの生活には大きな差が出てくると思います。学校では、教師、友人関係、または基本的な生活習慣の変化、また、文化間の相違からくる偏見や差別、国際紛争、民族、宗教などの大きな違いにより差別等も全くないとは言えない状況もあるだろうと思います。

ただ、そうした非常に大きな不安がある中ですが、今は補習教室に通っている子どもたちを見ていると、その不安の中、生きる力が生じてくる子どもたちの純朴さと強さをとても非常に感じております。

それでは、次に、世田谷区教育委員会帰国・外国人教育相談室で行われている事業について簡単にお話をさせていただきます。世田谷区立小中学校に在籍する児童生徒と保護者を対象に、主に次の4つの事業を実施しております。

まず1つは、教育相談。これは入国をする際に、手続ですとか、この世田谷区の様子はどうかという不安の声が海外から電話やファックスで届きます。それについて、今の世田谷区ではこういうことをやっていますということを説明して、その後に入国後にも、その手続について支援をすることがあります。

もう一つは、初期指導といいまして、全く、またはほとんど日本語ができない児童生徒に対して、初期指導という形で日本語の指導員を各学校に派遣いたします。そこで、もう少し日本語ができるようになった次の段階で、今度は補習教室です。

この補習教室は、梅丘中学校の校舎教室をお借りして、その中にありますが、日本語が大体できる児童生徒を対象に、土曜日と水曜日に日本語の指導と、水曜日の中学生対象に関しては教科指導及び進路等のカウンセリングも行っております。

そして、4番目は、保護者を対象にした通訳派遣です。学校で行われる保護者会、個人面談、三者面談ですとか、そういうときにやはり通訳の必要な保護者に対して、通訳者の派遣をいたします。

先ほどの初期指導について、もう少し詳しくお話をさせていただきます。まだほとんど日本語ができない子どもに対して、母語ができる日本語指導員を各学校に派遣して、別室で小学生36時間、中学生は40時間の日本語の指導を行います。この指導者は、世田谷区教育委員会と契約をしている会社より派遣をしています。これは初期指導の様子なんですけれども、個別で1対1で指導を行っています。平仮名から、1つの単語から時には片仮名まで、小学生36時間、中学生40時間の指導を行い、それが終わった後には少しずつ日本語ができるようになっていきます。

その次の過程として、先ほど言いました補習教室に通うこととなります。梅丘中学校にあります教室をお借りして、日本語が大体分かる小学生、中学生を対象に、土曜日と水曜日に日本語指導、教科指導を行っています。土曜日は、小学校、中学生を対象に午後2時30分から4時30分の2時間、水曜日は中学生を対象に午後5時から7時、日本語と同時に、希望する教科についても中学生については行っています。月に2回程度、年間24回ずつ実施をしています。

これは、その補習教室の様子です。まず最初に、初めの会を行います。そこに小学生、

中学生、講師が全員集まります。そして、そのときに担当者から本日の予定、また、日本の文化や風習に触れたお話をして、子どもたちに、日本の文化、風習について触れさせます。節分ですとか、七夕ですとか、そういったようなことが今までも行われています。

もう一つ、3年前から実施しているんですけども、音読発表会を全体の前で行ってあります。声に出して音読をすることによって、それが大きな自信になり、そして日本語の上達につながるということになり、とても自信がついていると思います。そして全体の会が終わりますと、それぞれの教室に分かれてそれぞれの学習に入っていきます。1年生から中学3年生までいますので、発達特性や日本語力に応じた個別の学習、またはペア、またはグループによって学習を進めていきますが、このときのグループの組み合わせなんですけれども、同じ学年同士、または日本語のレベルが同じ、または同じ母国、国同士でグループを組ませる工夫をしております。基本は同学年としているんですけども、同じ母国でグループをすることによって、非常に心を打ち明けながら、心がつながりとても安心する、そういうようなプラスの面も多く見てまいりました。

そこで、今現在の7月1日の補習校の在籍数についてお話をさせていただきます。今、合計で76名、17の国から来ております。小学生が39名、中学生は37名です。先ほど言いましたように、今やはり中国の子どもたちが非常に多くなっているのが現状です。学年別に分かれますと、中2、中3の子どもたちが非常に多くなっております。

次に、言語の習得についてお話をしたいと思います。基本的には対人伝達能力、人とコミュニケーションを取れるような能力と捉えていいと思うんですけども、よくこれを生活言語と言います。子どもたちは、約一、二年たつと、子ども同士で日本語で会話がどんどん進んでいきます。また、1人で買物に行ったり、そこで何かを相談したりという自分で発信することは結構できるようになっていきます。これは通常の生活の場面で必要とされている力で自然に習得ができます。約一、二年です。ただし、非常に流暢な日本語でずっとしゃべれるということであっても、これは日常的生活言語能力にすぎないです。

それに対して実際に学校に行っても必要な言語、認知力、思考力、判断力、理解力といったものを身につけるために必要な能力は、学習言語能力が必要になってきます。言葉で考える、または、言葉によって自分たちで範囲を広げていくですとか、抽象的な概念、またはそういうものを自分たちで理解して説明ができるようになってくる。このような学習言語の能力は、自然に身につけることは不可能です。計画的に組織的な学習が必要です。習得には5年から7年かかっています。

今、子どもたちの学校生活の様子で、学習面と生活面に分けたときに、やはり大きな困難があります。学習面、やはり手を挙げて発言をする、発表する、非常に勇気の要ることです。また、中学校では定期考査がありますので、もう如実にその点数が出てしまう。この点数はもう先生方も分かっている、その内容についても地域と学校でも指導していただきますけれども、やはり点数が低くなった生徒については勉強についての意欲もまた非常に難しくなってくるのも実態です。先ほど言いました学習の経験が今までいた国で既習経験があるかどうか、または学習言語の習得があるかどうか、そういうものについて、特に中学生では差が開いてくるところです。そして、中学3年生は進路についても不安材料としてあります。

次に、生活面、友達関係、学校行事、特に宿泊行事につきましては、学校を離れ、また親元を離れて寝食を共にするということに関して子どもたちは非常に抵抗感があります。相談相手、または生活習慣の違いによる困難さ等も出てきています。そして、このような状況を受けて、少しでも子どもたちの力になれないだろうかという課題を受けながら行ったのが、国士舘大学の学生による支援が始まりました。国士舘大学の大学生、大学院生による支援です。

これは、大学院生が公立小学校に入って、同じ母語の子、今回は中国の子どもに対して中国の大学院生が教室に入り、その子どもの隣で担任の指示や発問に対して分からないところを中国語で少し支援をしてあげる。隣に寄り添っているだけで子どもも非常に安心しますし、日本語の勉強と同時に、学習の理解、先ほどの学習言語にもつながる1つの大きなきっかけになっていく。

もう一つ、学校生活への支援。これは1つの例なんですけど、今、各学校では母語を使っている生活アンケートの振り返りを行っていますが、全て日本語で行っています。学校生活のアンケートということで、友達はいますか、学校は楽しいですか、相談相手はいますか、いじめられたこと嫌なことをされたことがありますかというのを、各学校で定期的に行って、ペーパーで子どもたちがそこに記入をしていきます。しかし、これはやはり日本語のよく理解できない子にとっては非常に困難なものです。そうした中で子どもが、今回でいうと大学院生と言葉によって交わしていきながらその実態を把握して、その実態を担任に伝えて、そして、それを子どもの学校生活に生かしていくというような経験もこの中にはあります。

それでは、これを担当した大学院生からお話をさせていただきます。

○張 国士舘大学人文科学研究科博士課程2年の張琢月と申します。今回は世田谷区立小
学校で行われた日本語教育支援活動について報告をさせていただきます。どうぞよろしく
お願いします。

私は、2023年の6月から9月にかけて、毎週火曜の9時30分から11時30分まで、合わせ
て8回の支援活動を行いました。支援方法としては、教室に入り、一緒に授業を受けると
いう形でした。支援対象の生徒が授業中に分からないところがあれば、すぐに簡単に理解
しやすい日本語で説明し、それでも分からない場合は中国語で解説を行いました。このよ
うにして、支援対象の生徒と一緒に国語、理科、算数、水泳、交通安全の講習会などの授
業に参加し、貴重な支援時間を過ごしました。

支援活動を通して外国籍の学生が勉強するときに直面しなければならない困難の難しさ
を深く感じました。例えば難しい漢字がうまく理解できないことや、自分の感想をうまく
書けないことが挙げられます。また、さっき宮本先生がおっしゃったとおり、クラスの皆
さんの前で発表する際も、声が小さ過ぎて自信が足りないように感じました。

短い時間の支援でしたが、自分の意思で日本に来ているわけではないという生徒たちの
支援が有意義であると思っています。これからも引き続きの支援、あるいはこのような教
育に関する支援活動について力を入れたいと思っています。また、自分も今回の短時間の
支援活動を通じて、地域の小学校に見学ができ非常に光栄だと思っています。さらに、小
学校施設設備のよさ、授業内容等活動の豊富さにも感心しました。

御清聴ありがとうございました。

○宮本 ありがとうございます。

続きまして、社会教育主事を目指す大学生の実習事例について報告をさせていただきます。
2名の学生が水曜教室を参観して、自分たちでできることは何かないだろうかという
ことで検討をして、その結果、中学3年生が高校受験に必要な面接の面接官をやりたいと
いうことで実施しました。今までは、私ですとかほかの担当者がやっていたんですけど
も、そういう意味で、初対面の面接官は受ける側も非常に緊張感があります。もちろんプ
ライバシー、人権についての配慮など事前に必要なことについてはきちんとこちらのほう
から知らせました。

この写真は、中学3年生の女の子が2人の学生さんに面接を受けているところです。初
対面ということもあり、今まで中学3年生の顔つきとは違い緊張感があり、中学生にとっ
ても非常にいい勉強になりました。

それでは、ここで実際に体験した大学生よりお願いします。

○千田 国士舘大学文学部4年の千田と申します。私は昨年度、9月から6回にわたって日本語教室の実習に参加させていただきました。

当初の目的としては、まずどのような方法で学習支援がされているのかを観察するということと、生徒とのコミュニケーションを図るというものでした。後に生徒とのコミュニケーションを図ることに加え、自分たちも何か学習支援に携わりたいという目的で面接指導を行った中での印象としては、生徒の日本語レベルの高さに驚いたというのと、あともう一つ、生徒の学習意欲の高さにその都度驚かされていました。生徒のもっと学びたい、もっと面接がうまくなりたいというやる気に応えられるように、楽しみながらも真剣に向き合い、実習に取り組んでまいりました。

今年度も昨年度に引き続き実習に参加をさせていただいております。昨年度の反省を生かして、学習支援だけではなく、現場でしか体感できない新たな発見ができるように、引き続き頑張りたいと思います。ありがとうございます。

○山口 国士舘大学から参りました山口玲奈と申します。私は、昨年度、約3か月間、計6回、実習に参加させていただきました。実習に参加する前は、通訳する人がいるのだろうかとか、従来のような学校で行っている授業ではないかと考えていました。実際に行ってみると、各科目担当する先生によって授業のスタイルというのが結構異なっていて、少人数であったため、分からないところというのを聞きやすい環境が整っていました。実習に参加する目的として、多様な学習支援に触れながら理解するということだったのですが、実際に学習状況であったり、日本語に対する配慮といったところで、一人一人に合った多面的な支援を行っていました。

当初は右も左も分からない状態で、新しいことを吸収するだけで何もできませんでした。まずは、生徒と関わることに着目して、学生である私たちに何ができるのかなというふうと考えて、受験を控えている中学3年生の面接練習に面接官として携わることを提案し、従事しました。実際に面接官をしてみて、とても緊張しましたし、生徒にとって大切な時間を無駄にしているかという不安がありました。

また、一番驚いたのは、生徒のレベルがとても高いことで、例えば面接練習を通して分からないことは分からないというのをきちんと伝えて、自分の伝えたいことにきちんと感情を込めて日本語で表現できている生徒がとても多かったです。また、日本の面接の形式であったり、アドバイスしたことの吸収がとても早く、後半は踏み込んだ質問であったり、

社会情勢に関する質問をするなど自分のほうが追いつくのに精いっぱいでした。将来の夢について聞くと明確に答えていて、なぜ興味を持ったのか、あるいは夢に向かってどう取り組んでいくかということをきちんと言葉にできていて、面接官を通じて勉強になることがとてもたくさんあり、やりがいを感じていました。

現在も実習を行っていて、昨年の実習の反省も踏まえて、もっと積極的に行動していくことを目標に日々励んでいます。昨年は自分から生徒に関わることというのがほとんどできなかったのですが、先週、自分のほうから話しかけて、生徒とたわいもない会話をすることができて少し成長することができたなど感じたので、引き続き頑張っていきたいと思っています。

御清聴ありがとうございました。

○宮本 ありがとうございました。

今のは昨年度の事例ですけれども、今年度ももう既にスタートしております。同じように小学校の教室に入って、同じ母語の子どもと大学院生が横に付き添って、学習面、生活面での指導をしています。

右側の写真は、学校側のほうでもとても協力をしていただいて、大学院生に副校長先生がいろいろと情報を提供してくださったり、御指導をしていただいているときの写真です。また、もう一つは、土曜教室、水曜教室を参観して、昨年度のような何か関わりができないだろうかというようなことで、現在も実施しているところです。

以上で私からの発表を終わります。御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。改めて大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

ちょっと時間も押しておりますが、学生さん、生徒さんに前に出てきていただいて、区長と教育長からそれぞれコメント及び御質問をいただきたいと思います。

それでは、先に教育長、コメントと、できましたら大学生と生徒さんに御質問をいただけるとありがたいです。

○知久教育長 今の国士舘大学と若林小学校、日本語支援事業、それぞれ大変興味深く聞かせていただきました。発表者の皆さん、お疲れさまです。また、若林小学校の取組等、地域の方々に大変支えられた中での活動となりました。商店街の皆様をはじめ、国士舘、村上先生をはじめ皆様に深く感謝申し上げたいと思います。

それぞれの事業をお聞きして、1つポイントは、大学生と小学生、あるいは中学生なんですけれども、やっぱりその年齢の近さにあるのかなということを感じました。日本語支

援事業では母国の学生のサポートを受けた児童の方々が、授業の支援だけでなく日頃の悩みだとかも御相談したというのもお聞きしています。

そんな点で、実際に学生の方々に聞きたいんですけども、場合によっては、御兄弟で同じぐらいの年齢の方もいらっしゃると思うんですけども、改めて小学生や中学生と今回関わった中で何か発見などあれば教えていただければと思います。

○千田 御質問ありがとうございます。私自身、年の近い妹が中学生にいます。新たな発見、この日本語教室でもやっぱり自分から話しかけにいく、私自身から話しかけにいくと、最初は生徒さん側のちょっと抵抗といいますか、あまりコミュニケーションを取ってくれないというちょっと難しい場面が多々あったんですけども、面接指導を行っていくにつれて、生徒さん側から、ここはどうしたらいいですかとか、ちょっとここが分からないんですけどもという、たわいない質問とか会話とかができて、最初はやっぱり心の距離というのがあって、うまく携わることがちょっと難しかったんですけども、やはり発見としては、日本語レベルに合わせた自分も会話をすることで、生徒さん側から心を開いてくれて、コミュニケーションが取れるという発見がありました。ありがとうございます。

○知久教育長 ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。皆様、拍手をお願いします。(拍手)

それでは、区長、コメントと、できましたら生徒さんに向けて御質問いただけるとありがたいです。

○保坂区長 ありがとうございます。村上先生から、ギブ・アンド・テークではなくてウィン・ウィンで、勉強じゃなくて学びなんだというお話、非常につながった2つの報告だったと思います。

まず、若林小については、私も国士舘大学の佐藤学長から、区長、見ましたかと言われて、いや、そのとき見に行けていなかったもので、ちょうど3月9日の若6感謝祭というところで「ライオンキング」をやるのでというところで見せていただきました。風邪で休んだ子とかがたくさん出て大変だったみたいですけども、大変熱気のあるポジティブな舞台だったと思います。

また、国士舘大学に留学されている方たちと、教育センターメッセで、十七、八人の方と一緒に弁当を食べながら、どんな形で学校に入っているかみたいなことも聞いていたので、さらに深い段階に進んでいるということを知りました。ありがとうございます。

生徒さんお二人に聞きたいんですけども、2つあります。これまで受けてきた授業と

違ったという感想があったと思います。今回の若林の名物を作ろうとか、大学祭に出てみようとか、いろいろみんなで話し合っただけで決めたと思うんですが、どこが違ったんだろうというところ、1点目はね。

2点目、これは初めての試みだったので、先生方も大変応援してくれたと思うし、保護者の方、地域の方もすごく協力してくれた、大学のほうも本当に、初挑戦というのはいろいろ手厚く迎えられる面があると思うんです。でも、今の若小の6年生、そのときの5年生ということで、いい試みはできれば継続してほしいと思うので、これを継続するためには何が必要かなというところをお二人に、2点聞きたいと思います。

大丈夫ですか。これまで受けた授業と何が違っていったのか、継続するためにはということをお願いします。

○タノウエ これまでと違ったところという点で言うと、小学校というところでは大体学習したりする場所だと思うんですけども、そこで自分たちで商品を開発して、それをお客さんに売り出すという、販売するという経験がとても新鮮だったのでそういう点かなと思います。

○ケタ 御質問ありがとうございます。続けていくためにはどうか、継続するためにはということだったんですけども、多分、若6感謝祭で商品を買ったりするというのが多分自分たちが若小で初めての試みだったと思うんですね。そこをやっぱり次の代とかにつなぐためには、よく背中で語るとか、先生に教わったんですけども、前の代を見てやっぱり学んだりすることが多かったのも、ちゃんと後ろの代に見せられるような活動をしていくということ意識してやっていたし、今もそうすることが大事な、次の世代につなぐためにもそういうことが必要になってくるのかなというのは思いました。

○保坂区長 ありがとうございます。しばらく前、十何年間、日野皓正さんという世界的なジャズの先生を校長にするドリームジャズバンドという中学生でつくるバンドを世田谷区でやっていたんですね。本当に短い時間で一人一人がステージに立てるくらいの猛練習をしてやっていたんですけども、それが成功したのは、やっぱりその中学生を終えて卒業した子たち、高校生、大学生になった子たちが、いよいよ新しい子たちが入ってくる時に戻ってきて、ここだというときに支えてあげたり教えてあげたりしたということが秘訣だったように思うので、そういうことをちょっと分かっているようなので、頑張っただけで後輩を支えてくださいね。

○司会 ありがとうございます。シナリオにない質問に対してすごい答えで本当に驚き

ました。皆さん、改めて拍手をお願いいたします。(拍手)

生徒、学生の皆様、本当にありがとうございました。こちらで生徒、学生につきましては退場させていただきます。ありがとうございました。改めて拍手お願いします。(拍手)

さて、この後ですが、10分間の休憩を挟みまして、区長と教育委員会による意見交換を行います。休憩時間に御質問を集めさせていただきます。会場で質問票に記載いただいた方は入り口付近の会場係員にお渡しください。また、オンラインの方につきましてもZoomのQ&A機能により質問をお寄せください。

それでは、これより休憩に入りまして、15時15分から再開いたします。

(休憩)

○司会 それでは、時間になりましたので再開させていただきます。

初めに、坂倉委員より、御自身で取り組まれている活動の事例紹介をしていただきたいと思います。

それでは、坂倉委員お願いいたします。

○坂倉委員 皆さん、こんにちは。あと、オンラインで聞いてくださっている方もありがとうございます。教育委員を務めさせていただいております東京都市大学の坂倉と申します。ちょっとだけお話の時間をいただけるということで、7分ぐらい事例紹介させていただこうと思います。前半の事例に続いて、この後のディスカッションにつながっていくような話題提供ができればと思っています。

タイトルがちょっと聞き慣れないかもしれませんが「15分都市としての学び舎の可能性」としてみました。学び舎も、教育関係者以外はあまりなじみがないかもしれませんが、中学校区で、中学校1つに対して小学校2つの小地域の取組をしていこうという世田谷区の独自の仕組みなんですけれども、前半の事例は、本当に若林小学校の事例はすばらしくて、取組内容そのものもさることながら、実は国士舘大学と若林小学校の地理的な近さ、近接性と言いますけれども、あるいはこの総合教育センターとの位置関係がすごく重要。近接性がお互いの気かけ合う関係をつくっていく。そして、何か困ったときにちょっといろいろサポートし合ったりとか、いろんな活動を一緒につくっていくということで、近年ますます近くにいるということで、ご近所ということの意義とか意味とか、可能性というのが変わってきていると言われていたのですが、そのようなことをテーマにちょっとだけ事例紹介と今後の展望についてお話できればと思います。

それで、今年の総合教育会議で実は教育委員の皆さんと視察に行った神山町の紹介をし

ました。神山町は、最近では高専ができたとか、IT企業の誘致とかで有名な徳島県の山の中の町なんですけれども、神山町の創生戦略の中で、よい学校と教育があるということがすごくまちづくりの中に位置づけられていて、このいい教育があるということが、この町の好循環をドライブしていく。そして、ちょうど学び舎と同じなんですね。神山町は中学校1つと小学校2つで人口が5000人ぐらい。その教育が、教育のための教育ではなくて、町の中の教育として、資源が少ない山あいの町なので、ありとあらゆる町の活動が学びとつながって進められている町です。

ここから、すごく示唆的だったのが、学び舎単位でいろいろやっていくことの可能性、学校から地域を見るのではなくて、地域の中で教育を見ながら、学び舎単位の小さい地域でいろんな分野の活動と教育が相互につながっていくような循環的なコミュニティーをつくっていくこと、これが、すごく大きな90万都市の世田谷だからこそ、小さい単位で動かしていける可能性を感じます、という話をしました。

私の活動は、東京都市大学がある尾山台地域、おやまちプロジェクトという活動を2017年からやってきました。これは地域の課題解決というよりは、町に住んでいるいろんな立場の人が楽しいとか、やりたいとか、そういう内的な動機づけでつながることで、そこからどんどんいろんな活動が広がっていく、こういうプロジェクトです。プロジェクトと云っていいか分からないんですが、この中で、もちろん小学校の先生、中学校の先生、子どもたちともつながって、小学校の新しい授業をつくるとか、商店街と一緒に小学校6年生がマルシェをするとか、こういった活動がたくさん行われてきています。

今日はその紹介もたくさんしたいのですが、その中から、その次の展開として、小さい地域の中でいろんな人が集まってくると、個人だけじゃなくて、学校とか病院とか、あるいは企業とかいろんな人が、そのコミュニティーと一緒に何かやってみたいということが起こってきました。

どういうことかという、教育でいうと、今の社会に求められている学びを全て学校の中、学校の関係者だけでつくれるのであればいいんですけれども、いろいろな可能性、キャリアのこととか経験のこととか、それから地球全体のことを考えて行動できるか。そんなことを考えると、学校の中だけ、先生だけでは、今必要な教育というのをつくっていくことがなかなか難しい。だから、地域と連携をしたい、学校の外の人と一緒に作りたいということになってくる。そうすると、それは病院でも企業でも同じなんですけれども、地域というのは何か課題があるものではなくて、いろんな専門的な領域の人たちのその中

だけでは解決できない問題を、みんなで寄ってたかって解決していく、そういう場所なんじゃないかということで、リビングラボというものをつくっています。

リビングラボは、市民中心でいろんなセクターの人たちと一緒に新しい社会システムをつくっていくという、ヨーロッパ中心に広がっているアプローチなんですけれども、尾山台は尾山台で、日本らしいというか、尾山台らしいリビングラボをつくろうということで、ハッピーロードに面したタタタハウスのコミュニティスペースの2階にラボを設置して、ここで学生がいろんな活動をしたり、企業の方や地域の人といろんなプロジェクトを進めていくということをやっています。

このラボで、それこそ本当にこの小さな地域をテーマにして、国の研究プロジェクトから地域活動をしている人たちの活動を後押ししていくものとか、世田谷区の公園づくり、野毛公園をつくるデザインのプロジェクトに伴走したりとか、あるいは企業のいろんな研究プロジェクト、デザインプロジェクトを行うということを進めてきています。すごく大事なのが、このおやまちリビングラボという、学校でも商店街でも企業でもない場所があるというのが、単なるギブ・アンド・テークではなく、ウィン・ウィンとさっきお話がありましたけれども、要は2者でやると、どっちかのためにどっちかが協力するという関係になりやすい。ただ、学校と商店街と企業の人が、それらのどこでもないところに出てくることによって、一緒に何か新しいものをつくっていく。さっき価値と目的を共につくるというお話が村上先生からありましたけれども、まさにそれがしやすい場所というのは、学校の中や企業の中ではなくて、どこでもない場所というのはすごく大事。ここからオープンイノベーションが始まるんじゃないかなということを実感しています。それを、本当にこの尾山台という町で、ものすごくいろいろな、ありとあらゆる分野のプロジェクトを、ありとあらゆる立場の人とやっているというのがおやまちリビングラボです。

ここから、これを地理的に見てみると、尾山台駅があって、尾山台小学校、中学校、玉堤小学校、これが学び舎の単位ですけれども、そこの中に東京都市大学という大学もあって、等々力溪谷があって、住宅地がその間に広がっている。地理的に見るとこういう町なんです。1個1個のプログラムを見るといい教育ですよという話なんですけれども、ちょっと俯瞰して、暮らしの場というふうに見てみると、教育だけではなくて、ここがいろんな意味で、いろんな人たちにとって暮らし心地のいい町になっていく、そういう可能性が見えてくるんじゃないかなというふうに思います。こういう小さい地域で暮らす、近接性というのは、自転車や歩きで15分ぐらいの範囲の中で生活の必要が大体手に入る。そ

して、大事なのはサービスだけではなくて、そこに近接して住んでいる人たち同士でつくり合っていく、ケアし合う、そこにはないものについては自分たちでつくり合っていく、そういうような関係性がある暮らしということですね。

これが、私が主張しているというよりも、パンデミック以降のヨーロッパを中心にした都市論の新しい世界的な潮流で、ウォークブルシティとか15分都市というふうに言われています。大事なのは、利便性とかというよりは、近接性、暮らしの中で関係的な近接が起こりやすい町になっているといろんな意味でケアがしやすい。お互いに気にし合ったり、何かあったときに助け合っていけるようなそういう暮らし、これはパンデミックでそういうことができなくなった実感から広がっているわけですけども、そういう近接性がケアの基盤になっていく、そういう町が目指されていたりします。

日本でもそういう取組みが少しずつ入ってきましたけれども、どうしても商業偏重になっている問題点があると思います。もっと住宅地域におけるウォークブル、パブリックライフの空間をどういうふうにつくっていくのかというのが、福祉とか教育とか環境とか、いろんな分野を超えた総合的な意味として広めていくことが必要なんじゃないかということですね。

これはパリの事例ですけども、要は右側の絵の建物の上階には人がいっぱい住んでいるんですけども、足元を見ると車が通っている。この車が通っていることは本当に町の暮らしの質の向上のために必要なのか、車を通さなかったら、右のように、そこではベンチで腰掛けてゆっくりできたりとか、おしゃべりができたりとか、御飯を食べたりとか、コミュニティーのいろんな活動ができたり、知り合いが増えて、何なら友達ができてみたいなことができるじゃないか。だから、道路に車を通さなくていいんだったらみんなが集まれる場所にしていこうよというのがウォークブルシティのポイントです。15分都市というのは、家から徒歩や自転車で15分ぐらいの中で、学校もあるし、病院もあるし、自然も享受ができるし、健康的な食べ物も食べられるし、運動もできるし、コミュニティーにも参加できる。こういう暮らし、こういったことが実現できるまちづくりがこれからの時代は重要なんじゃないですかということです。

絵で見るとこんな感じになってきますけれども、重要なのは、今日は教育の場なので、近接的な場所のイメージですね。こういうところで、お互いにケアし合うというか、気にかけて合う、そういう関係が広がる。こういう場所があったほうが、人格的な関わりというのがありましたけれども、役割でサービスを提供しにいくんじゃなくて、顔見知りがどん

どん増えていくみたいな、そういう関係ができやすい。こういう町が目指されている。

ヨーロッパの例をこれまで紹介してきましたけれども、ぐっと世田谷に戻ってきて、これが尾山台ですね。ヨーロッパがいいと言っているわけではなくて、日本だったら日本の状況に合わせたパブリックスペース、みんなが知り合いになっていけるようなそういうまちづくりができるんじゃないかということを思っています。日本的なパブリックライフの場所というのをどういうふうにつくっていけるのか。

ということで、おやまちリビングラボでは、それこそ教育や福祉、医療、または公園の整備や商店街とか産業振興、いろんな意味でいろんな立場の人たちと一緒に、セクターを超えた共創プロジェクト、共に創るプロジェクトと言っていますが、こういったプロジェクトをたくさんやっている。重要なのは、プロジェクトをやると何らかの成果が出るということも大事なんですけれども、課題に対する新しい解決策と書いてありますけれども、それが出るのも重要なんですけれども、より重要だと思っているのが、分野を超えて集まって何かを共に創るという、そのプロセスを経て新しくコミュニティーができる。仲よくなったりとか、顔見知りになったりとか、お互いに気にかけて関係ができるということがすごく大事なんじゃないかな。これをいろんな分野、いろんなテーマで、あるいはいろんな人が集まって町の中でたくさんぼこぼこやっていると、やがて右側の自分のことだけでなく、自分の関心だけでなく、ほかの人の困り事とか、ほかの人が気にしていることというのをお互い自分のことであるかのように気にかけていく、あるいはいろんな立場の人たちの間のいろんな関係性が網目のように広がっていく。そうすると、安心な社会、そういう場所ができていくんじゃないかなと思っています。

ということで、安心できる、気にかけて関係性が町にふんだんにあると。さっき日本語の支援の中で、授業のことではなくて、最近どう？みたいなそういう関係が、声かけができましたとありましたけれども、そこはすごく大事ですよ。何かを教えるということだけでなく、それ以前に、最近どう、学校楽しい？みたいな、そういう気にかけて関係というのがベースとしてあった上で、何かあったときに最近元気ないねとか、学校の先生どうまくいってる？みたいなそういうことや、分からないことがあったら教えるよみたいな、そういう関係に発展していく、そういう町になっていくといいのではないかな。

そのときに、やっぱり近接性、近くで暮らしているということがすごく重要なのではないかな。世田谷区では学び舎という単位がありますので、これがセクターを超えた共創の場になっていて、その中にオープンなパブリックスペースというのが多様にふんだんにあっ

て、お互いにケアし合うコミュニティーが生まれる。そうすると、そこから世田谷らしい、教育だけではない、いろんな分野も含めて15分都市の可能性として出てくる。そうすると、そういう環境の中で学び育っていく、あるいは子どもを育てていく人たち、あるいは子どもに多様な形で関わる多様な大人が生きている、そういう町というのが見えてくるんじゃないかなと思います。

ちょっと長くなってしまいましたけれども、私からの話題提供は以上です。

○司会 坂倉委員、ありがとうございました。

ここからは、区長、教育委員会による意見交換を行います。また、前半で御講演いただきました村上先生にもゲストとして御参加いただき、議論に加わっていただきたいと思います。皆様、よろしく願いいたします。

なお、ここからの司会は宇都宮センター長にお渡ししたいと思います。よろしく願いします。

○宇都宮教育総合センター長 教育総合センター長の宇都宮でございます。よろしく願いいたします。短い時間ですけれども、活発な意見交換ができればいいかなと思っております。

本日のテーマ「これからの世田谷の学びについて～子どもたちの多様性や個性を伸ばす学びの場づくり～」ということで、前半の基調講演ですとか取組事例を踏まえて、今後、学校と地域がつながる取組を広げていくためにはどうすればよいのかということ、事例や経験、それから期待することなどをそれぞれの視点でお話しいただければありがたいと思っております。よろしく願いいたします。

まず、澁澤先生、お願いできますか。

○澁澤委員 大変大きいテーマで、ここでどういうお話ができるかということなんですけれども、私、先ほど、村上先生のお話でいうと、既存のコミュニティーの大会で基調講演を先ほどまでやっています、その関係で今日そちらに出席できなかったということなんです、岐阜県大垣市というところで地区の自治会の会長さんたちの総会があってそこでの講演でした。

私は、やっぱり既存のコミュニティーも見てきて、地縁でつながっている煩わしさというのはとてもよく分かるんですが、既存のコミュニティーと新しいコミュニティーのまさにその融合の形をつくっていかなければいけない。つまり新しいほうが進んでいて既存のほうは遅れているというような右肩上がりの発想というものを、私たちはそろそろ捨てな

ければいけないんだろうなというふうに思っています。

ただ、1つ、やっぱり子どもたちのためにどういう形でコミュニティーがつながれるかというのは、ある意味では次の世代のことをみんなで考えるということしかないと思います。今の子どもたちだけではなくて、これから生まれてくる世代の子どもたちに対して一体どういう学びの場を提供できるのかということ、今の生徒さんたちも、それから私たち大人も一緒に考える、そういう場をどうやってつくっていきけるかに尽きるのかなと思っています。

先ほど坂倉先生もお話しになっていましたけれども、このコロナを通して、人と人というのが結びつく、しかも、それは肉体的に近い距離で結びつくということの重要性というのを改めて知ったんだと思います。とって、私は今日、Zoomでこういう話をしていてというのはとても矛盾はしている話なんです、やっぱり面と向かってという、煩わしさもどうやって受け入れていくかという社会をどうつくれるかだと思っています。その煩わしさを、単なる我慢して煩わしさを受け入れるのではなくて、新しい未来をつくっていくという方向にベクトルを変えることで、みんなが新しい可能性をつくっていきけるのではないかなということで、私は学びを中心とした地域での教育ということにとっても期待をしています。

教育というのは一体どこにあるのか。今までは地域と教育の連携、学校の連携という、学校の活動を地域の人たちがどのぐらい支援してくれるのかということがほとんどの議論の中心だったんですが、そうではなくて、そもそも社会の中に、地域社会というものもあり、そして、その中には学校もあり病院もあり、いろいろなファクターがそこにある。あくまでも地域社会の中の一つのファクターが学校という場所なんだというふうに私は思っています。その意味で、究極なのは学校の中だけで子どもたちに学びの場を提供するのではなくて、やっぱり地域全体の中で学びの場を提供する。ただ、そのときに、今、一番ネックになるのは、子どもたちではなくて多分私たち大人側の問題だと思います。大人がまだまだ子どもを導いてあげるんだとか、子どもを教育してあげるんだ、指導してあげるんだというスタンスでいると、子どもたちと肩を並べて未来を考えるということはなかなかできないというふうに思います。

そのときに、地域の大人がどのぐらい同じ目線で子どもたちと一緒に考えていけるか、それがまさに今、私たちに与えられている課題でもあり、それから、その中に多分、未来の持続的な地域社会というのが唯一の存在できるの可能性だと、日々、私は思っております。

すので、何とか世田谷の大人たちも巻き込みながら、学校と一緒に育っていく、大学と一緒に育っていくというような関係、フランクな関係をつくっていければというふうに夢見しております。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。フェイス・ツー・フェイス、コロナの時代になかなか学校に地域の皆さんが入れない時期があつて、私も元校長ですから、そのときに本当に地域の方々に一緒に子どもたちに携わってもらいたいなどは思っていましたけれども、それがここへ来て、新たな形で、先ほどからお話に出ている新しいコミュニティがどうつくられていくのかということに着目されるのかなという気持ちであります。

続いて、中村委員、いかがでしょうか。

○中村委員 今日、村上先生、本当にありがとうございました。大変分かりやすいお話で、古いコミュニティ、新しいコミュニティという、私も大変腑に落ちたところがあるんですけども、それと、坂倉先生には以前からまちづくりのお話をよく伺っていましたけれども、このようなお話というのは、ある意味、学校経営にとって非常に重要な視点なんじゃないかなと。だから、本当に自分が校長だったときに、このお二人の先生が講師の研修会か何かがあつたらよかつたなと思った次第でございます。

地域連携というと、世田谷区の場合、まず子ども学校サイドから見ると全校がコミュニティスクールに指定されている。つまり各学校に学校運営委員会があつて、それから、名前が地域学校支援本部ですか、協働本部になったのですか？まだ支援本部ですか。よそでは学校地域協働本部と言っている。今の澁澤先生のお話もありましたように、やはり地域が学校支援するんじゃなくて、本来、学校と地域が協働するというのが一番の理想形なのかなと思います。そういう意味で、今のコミュニティの視点も含めて、世田谷の学校運営委員会や学校支援本部の現状をもう1回点検して、見直す必要もあるのかなという感想を持ちました。

例えば私の別の仕事で今一緒にされている方から御紹介いただいたのですが、「地域とともにある学校づくり推進フォーラム」というのが、奇しくも今日、全く同じ時間に山梨県で行われています。ここで八王子市の元教育委員の方が発表されているのですけれども、例えば八王子市では、世田谷区の地域学校連携課に相当するような地域教育推進課というのが、コミュニティスクールの連絡会をつくって、それでハンドブックづくりや研修会などもその委員の方と一緒にやっているという事例、それから協働本部では、さっきの若

林のサミットのような地域貢献の場をつくったりとか、あとは、子どもの居場所づくりをしたり、それから不登校の保護者の支援まで協働本部がやっているというそんな事例もあります。

振り返ってみて、世田谷の今、学校運営委員会とか支援本部というのが、村上先生のお話の中で出てきた古いコミュニティーというのがある意味ベースになっていないかなというちょっと感想を持ちました。もちろんそうじゃないところもあると思いますけれども、やっぱり地縁的な関係がやっぱり強い学校もまだあるんじゃないかなと思います。そういった点で、もう一度世田谷のコミュニティースクールの在り方、それから支援本部の在り方なんかをちょっと再点検してみるのも必要なのかなと思いました。

または、必ずしも学校と地域という関係だけじゃなくて、横浜のほうで私が以前も紹介した事例では、やっぱり放課後の中高生の居場所ということで、あおば未来プロジェクトというものがあります。この最終目標は、子どもたちが区長に政策提言をするというのが最終目標になっています。それを、やっぱりさっき区長の話にも出てきましたそこを卒業したOBの大学生が中高生の指導をして政策提言に導くというようなプロジェクトがあり、これをやっているのが、行政とNPOのコラボなのです。これは横浜の区役所の中の1セクションと地元のNPOがやっています。そのような子どものサードプレイスづくりというのも、地域連携の中ではあると思います。

いずれにしても、おやまちプロジェクトとか若林サミットのように、新しいコミュニティーと言えるようなプロジェクトが生まれているということは非常に素晴らしいことだと思います。坂倉先生のおっしゃる共創プロジェクトによる近接コミュニティーというのは、これが本当に重要なキーになってくるのかなと、そんな感想を持ちました。どうもありがとうございました。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございました。先ほどの澁澤委員がおっしゃった既存のコミュニティーと新しいコミュニティーがどうつながれるのかというところがキーワードの一つかなというふうに思いました。

鈴木委員、いかがですか。

○鈴木委員 本日は、村上先生、貴重なお話をありがとうございました。私はPTAの関係ですので、先生のお話を伺いながら、コミュニティーの違いについて、旧、新と言ったら変ですが、情けとメンツ、相手を尊重する関係性、地縁型のコミュニティーということは、まさしく今のPTAに当てはまるなど、思いながら伺っていました。PTA活動も今

後変わっていくということで、これからは自発性と多様性をベースに、所属感を薄め、自由と平等、こちらを基調に変革していったらいいのかなと思いながら伺っておりました。

それから、地域とPTAについてですが、コロナ前は、各小学校や中学校、また地域やPTAなどが主導になってワークショップなどを開催したり、子どもたちに何か関わるということを皆さんとしてきました。その時やはり私たちはついつい上から目線と申しますか、教えてあげなくてはとか、意見を言わなくてはという立ち位置になっていたと思います。今日の村上先生のお話や若林小学校の取組を見せていただき、同じ立ち位置、同じ目線になることの大切さを感じました。

先ほど澁澤先生のお話にもありましたように、今までは大人から子どもにと矢印の方向が向いていたと思うのですが、これからは、子どもから大人へという矢印という新しい取組方を考えるときが来たのかなと感じております。世田谷の目指す連携、ウィン・ウィンの関係についての理解を深めていくためには、私たち保護者や大人たち、地域の皆様との情報の共有、そういうことのウィン・ウィンの関係についての情報の共有の場やアドバイスを受ける機会が必要なのではないかなと改めて考えております。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。実は若林の学びは、実は今おっしゃったような形で、子どもたちの発想にどう大人が寄り添えるかという形で実現したのが商品開発ということになっているわけですね。今お話のあった中で、先ほどの村上先生の話で知識、理解、表現・判断力、学びに向かう力というのがありましたけれども、それこそ若林の学びというのは、実は学びに向かう力を育てたいがためにどうしていったらいいかということ、地域と、それから我々大人がどうつながっていくかということをお考えのものでした。

続きまして、坂倉委員、再びよろしく申し上げます。

○坂倉委員 先ほどちょっとお話しさせていただいたので短めにと申しますけれども、ほかの先生方のお話も聞いて今ちょっと思っていたのが、やっぱりどういうふうに関わりやすい町の状況にしていくのか。現在人は忙しいですし、人のことに余計な口出しをしたり、おせっかいを焼いたりするのはよくないとみんな思っているので、普通にしているとなかなか人に出会ったりとか、気かけ合う、最近どう、元気？みたいな声をかけるみたいな、そういう関係が生まれにくい。ケアという言葉の一番素朴な意味は注意することということで、自分以外の人に注意を向けるということ、都会に住んでいると、できるだけ周りは気にしないで自分の中で閉じないと電車にも乗れないみたいになりますけれども、何かちょ

っと他者に目を向けたりとか気にかけてりとか、顔見知りが増えていったりとかそういうことがしやすい町にしていくのが大事です。ひとつはさっきお話ししたように、学校だけとか、お店だけとかではなくて、町全体がいろんな人にとっての居場所というんですか、いてもいい場所になっていくということはその前提としてすごく大事になって思うんです。

あともうひとつが、教育というか、学びから地域を見てしまうと、そういうふうには見えにくいですし、どうやったらいい学びをつくれるかなというふうに、つい教育の場だと考えてしまう。考えるのはすごく素晴らしいことなんですけれども、地域を俯瞰して見たときに、学びだったり、学校だったり、子どもというのが、実は第三者である大人が関わり合うすごくいい口実になるというか、子どものためにこういうプロジェクトをやっているんだから力を合わせようよとか、いろんなものを持ち出してやっていこうよみたいなことが、結構起きやすいんじゃないかなと思うんですね。子どもまんなか社会みたいなそういうことも言われますけれども、子どもを真ん中にして子どもしか見ないと周辺が見えなくなってしまうんですけれども、子どもを媒介にしながら、あるいは学校とか学びを媒介にしながら、いろんな人がそこに関わるみたいなことをすると、結果的にその周りの人たち同士もつながりやすくなっていく、そしてそれは役割ではなくて、人格的な顔が見える関係としてつながっていくためには、それを小さい近接的な世界、社会の中で、つまりその学び舎単位でやっていくみたいなことが、ほかの先生方のお話を聞いても可能性をすごく感じて、世田谷のこれからの学びを考えるときのヒントになりそうだなというふうに思っています。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。実は地域連携を進めていく中で私たちが考えているのは、子どもたちが〇〇に出会うまち世田谷というのを目指しているんですね。それは大人がつくったものではなくて、子どもたちが町を探して歩いているときに、遊びに出会ったりし、今おっしゃったように、大人に出会ったり、何かをつくっている人に出会ったり、そういうものに出会っていく中で学びを進めていくということができるといいねというので、ハローキャリアワークという事業を幾つか展開して、やっているものがあります。ありがとうございます。

村上先生、お待たせしました。

○村上氏 坂倉先生のお話を伺っていて、やっぱり私たちの真ん中に何かを見いだすということですね。子どものためという目的を見いだすとか、そういったことで今までできなかった人間関係ができてくるというお話をされたと思うんですけれども、私が申し上げた

新しいコミュニティーというのもまさにそういう意味で、私たちの間に何か大事なものを置いて、それを一緒に見ようという、そういうことをつくり上げていくことが、これからのコミュニティーを持続可能なものにしていくために大事なのではないかなと私自身は考えていますし、私の大学も、世田谷区と仲よくなりたいという目標をお互いに共有できて、そしていろいろな活動を一緒にやっていく。つまり私たちの中に何か一緒に共有するものを置くという、そういうことを大事にしたいなというふうに、今日お話を伺って改めて思いました。ありがとうございます。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

教育長、お願いできますか。

○知久教育長 村上先生の基調講演と関連するんですけども、10年前になるんですが、自分の体験も踏まえてお話をさしていただきたいと思います。私が烏山総合支所の地域振興課長だった際に仕事で取り組んだエピソードです。

烏山地域の活性化推進というテーマで職員提案を受けまして、烏山地域の御当地キャラクターをゼロからつくろうという話になり、そのミッションを課長着任時に受けました。職員や地域の方々も巻き込みながら取組を進めて、キャラクターのデザインですとか、ネーミングも決まりまして、「からびょん」というふうに名づけたんですけども、この着ぐるみを地域のお祭りで発表して、平日には地域の幼稚園ですとか小学校に出向き、子どもたちの認知度も徐々に上がっていきました。ところが、地域から、やはり土日のイベントに出てほしいというお声もいただいて、そうするとやっぱり職員の休日出勤が増え、なかなか職員の協力も得られなくなり、次第に立ち行かなくなる状況が出てきました。

そんなときに協力を求めたのが、烏山地域にあった日本女子体育大学さんでした。大学の窓口から、ダンスを通じて公演やイベントを企画していたダンス・プロデュース研究部というクラブを御紹介いただきました。顧問の先生に依頼に伺ったんですけども、その際に先生から強く言われたのが、行政に利用されるような使われ方は嫌だよと。学生もウィン・ウィンで、ウィン・ウィンという言葉だったのか、メリットだったのか定かではないけれども、そういったことをまず、釘を刺されました。

この先生のお言葉で、当初、我々もアルバイト的に協力をいただけないかなというような考えもあったんですが、そこから、学生たちと一緒に烏山地域の活性化、子どもたちにいかに愛着を持ってもらうかという検討を真剣に進めました。当時のこのダンス・プロデュース研究部の中心メンバーだった3年生が中心になって、キャラクターのダンス、また、

地域の地名や由来などを歌詞にした歌を作ってくれたり、ダンスをメイキングしてその映像を作ってくれるなど、学生たち自身で作りに上げてくれた歌やダンスを通じこのキャラクターの魅力をも十分に高めていただいたということがございました。

こうした初期の取組が功を奏したんだと思いますが、昨年、地域のお祭りで、この「からびょん」の誕生10周年を祝うダンスを、当時の中心メンバーからはるかに後輩に当たる学生たちが、大勢の方々の前で披露してくれました。地域の皆さんと10歳の誕生日のお祝いをしてくれました。

このような息の長い取組を続けることができた理由を振り返ると、先ほどの村上先生が御指摘されていた区と大学、学生たちが地域活性化という価値や目的を共有して、楽しく共に関わるといった、先ほどから出ています新しいコミュニティー感覚で取り組めた結果だったんじゃないかと、今日のお話をお聞きして気づかされたところです。やっぱりキーワードは、価値や目的を共有できる、ここなのではないかと感じました。

基調講演のまとめにもございましたが、行政と地域の大学がそれぞれの個性を生かしながら新しいコミュニティーを創造するという方向性、ウィン・ウインの関係性、こういった視点から、今日の発表事例も参考に、教育委員会としましても、区長部局とも連携して、区立小中学校と、地域や大学といった地域の資源との取組を深め、また、新たなつながりをどうつくっていくか、教育委員会と学校で一緒になって考えていきたいと思っております。以上です。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

時間ももう少なくなってまいりましたので、幾つかいただいた御質問の中から、今日のテーマに関連するものを、1問は若林小の校長先生にお答えいただいて、もう1問は区長からお答えいただいてまとめにしたいと思います。

若林小学校に対する質問ということで、名物を開発しようという興味深い事例について、紹介ありがとうございました。質問1、どれぐらいの時間をかけて開発されたのでしょうか。校長先生。

○滝上校長 ありがとうございます。校長の滝上です。トータルすると12時間ぐらいですが、主に総合的な学習の時間で進めておりました。物を作ったりということで、例えば家庭科であったりとか、町を考えるとということは社会科であったりとか、教科等横断的な学習を通して、今回この学習活動を進めたところも一つ大きな特徴というふうに思っております。

○宇都宮教育総合センター長 カリキュラムマネジメントもお願いしましたので、そういった形でお答えいただきました。

質問2、大学生が協力したというお話でしたが、何人ぐらいの学生が参加したんでしょうか。

○滝上校長 話合いや若林サミットには本当に10人以上の国士館の大学生の方に来ていただきまして、子どもたちが例えば商品開発するときなども、自分たちの考えだけではなく、いろいろな人からお話を聞くことで自分の考えが広がった、そういう思いを子どもたちが体験できたのはとても有意義な機会だったなと思っております。本当に国士館の大学生の方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

○宇都宮教育総合センター長 先ほどの子どもたちの話の中で、背中を見て育つというのがありましたけれども、実はもう今年、5年生の子たち、6年生の子たちが昨年度の実践事例を見ていますので、それで今年の活動をもう既に始めているということだけ御報告させていただきますと思います。

それでは、区長、最後に、大学関係についてお答えいただくのととも、まとめていただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

○保坂区長 会場からの質問で、今日は村上先生にもお話しいただき、若林小の取組は国士館大学、また日本語を母語としていないお子さんたちの支援も、国士館に留学している学生さんということで、ほかの大学はどうなっていますかという御質問がありました。

実は世田谷区内は17の大学がありまして、ちょうど10年前から、区長と学長の意見交換懇談会というのをやっております。それ以外に、大学事務局と区側の事務局、教育委員会などで年に何回か打合せをしているので、全ての大学で小学校や中学校、あるいは様々な形で、今度は学校以外の区の仕事についても参加協力というよりは、一緒に協働してやろうと。そのプロジェクトを数えるともう100を有に超すというぐらいに現在なっているところです。今日は国士館大学を非常に中心に紹介できた会でしたが、ほかの大学も本当によくやっていただいています。

実はこの教育センターができたときに、高校も35校あって、国立、私立、都立とあるんですが、私が驚いたのは、大学の関係者と、都立高校、私立高校、国立高校の校長先生や、副校長、そして区の教育委員会と一緒に会ったのは、世田谷区ができて以来、初めてらしいです。やっぱり統括しているところが国だったり、都だったり、学校法人だったり違うので、同じ学校という名前は一緒だけれども、一緒の場で話をしたことがない。これ

は本当にもったいないことだなと思って、一緒に交流していきましょうということになり、この教育センターでも、STEAM教育を学芸大学附属の高校生たちが小学生に教えるプログラムが大変好評を博していたり、テンプル大学に国内留学というようなことで、大変多くの希望者が夏休みに申し込んでくれていると思います。そんなふうにとんどん輪が広がっているということをお答えにしたいと思います。

村上先生からのお話で、いわゆる勉強と一線を画した学びについて、やっぱり新体制を獲得した共感や価値を共有する、仲間と共に歩むという言い方をしたほうがいいでしょうか。そういうことについて、やっぱり新しいコミュニティー、これは15分都市という坂倉教育委員の話ともつながりますが、恐らく町内会や近隣組織、昔からある地縁団体とも大変大事な役割を負っていると同時に、そういったところに属さない、あるいはニューカマー的、ニューカマーといっても、世田谷に引っ越してきて30年という人も含めてですが、混じり合っ、同じこのエリアにいるんだからいろいろ協力しようよという、その一つの真ん中に子どもがいると。子どもたちの育ち学びがあるというのは、とてもいい発想だな。つまり地縁団体やその古いコミュニティーを否定するのではなく、そこを包摂しながら新しいコミュニティーが動き出す。

お聞きになっている皆さんの中で、世田谷区の公立学校が、毎日若林小学校のような町に出ていっていろんなことやっているかどうか、そうとも見えないんだけどというふうに思われる方がたくさんいらっしゃると思うんですが、やはり総合教育会議では、何とかして新しい学びの展開、転換これを具体化していこうということをずっと議論してきたわけで、ある種の実証プロジェクトとして、若小の例があり、そして僕たちは背中を見せて後輩たち伝えていきたいという非常にうれしい言葉も子どもたちから聞くことができました。

やっぱりこうやってできたんだ、こういうふうなやり方があるんだということをつくり上げ、または若小の例だけではなくて、次や、またその次の総合教育会議でもどんどん紹介ができる事例が増えていくと、世田谷区での特徴ある学び、地域連携というのが、学校に、地域の方々にサポートしてもらう、御協力いただくというワンウエーではなくて、むしろ学びそのもののプロセスと内容が地域にあると、そこを一緒に大人も子どもも歩むんだというあたりが、澁澤先生が毎回おっしゃってこられた議論を核にして教育大綱をつくりました。ちょうど1年前、この場で子どもたちがその教育大綱を読んで、子どもは未熟な大人としてはくくれないという一節があるんですが、そこにマーカーを引いて、初めて

こういう言葉で新鮮でしたみたいな、上からじゃなくてちゃんと横から語りかけてくれたと思いました、こういう感想を言ってくれました。

そういう意味では、総合教育会議の議論がだんだんらせん階段上るように、学びの質の転換はどうあるべきかから、どういうふうに今試行しているのか、どんなヒントがあるのかというところまで来ているのかなと思います。さらにその先へ、じゃ、横展開をどうするんだというあたりも今後の課題にしていきたいと思いますし、学びの多様化学校という新しいスタイルの学校をつくるということも、今、教育委員会と一緒に議論していますので、そういったテーマも次回ぐらいは皆さんに共有しながら、その課題と可能性について語れることができたらと思います。

以上でまとめといたします。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

では、司会にマイク戻します。

○司会 皆様、ありがとうございます。区長、教育委員会の皆様、村上先生、またZoomで御参加いただきました澁澤委員、ありがとうございます。

それでは、以上をもちまして、令和6年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。

なお、本日の総合教育会議は近日中に世田谷区の公式YouTubeにて配信する予定です。YouTubeでは過去の回も配信しておりますので、併せて御覧いただければと思います。

改めまして、皆様、長時間にわたりありがとうございます。これにて終了いたします。

午後4時5分閉会